

人権ほつと四年十月号

「宗教と政治と人権問題」

大阪教育大学名誉教授

堀 薫夫

今年最もショッキングなニュースはといえば、やはり安倍元総理銃撃事件であろう。しかしその後のメディアの争点は、むしろ山上容疑者の母親が入信していた旧統一教会問題であるように思える。1億円以上の献金により家庭が崩壊していたという容疑者の自供をそのまま受け取るならば、そうした家庭で生育した二世問題という人権問題も出てくるであろう。

私の学生時代もそうであったが、大規模な大学に入学すれば、新入生はしばしば3つのタイプの人から声をかけられる。スポーツ系のクラブ、政治系の団体、そして宗教系の団体。最近では後者の2つはしばしば正体を明かさずに近づいてくることが多い。あるいは接触してくる人間が真面目そうな好青年であることも多い。かつて私の大学の授

業で教壇近くに座り熱心に講義を聴いてくれた学生は、才ウム真理教活動家であった。

「丘の上の卵」という比喩がある。丘の上の卵はいろいろな方向に転がるが、たまたま同じ方向に転がった卵がその後ずっと一緒になるということをさす。大学新入生のときに宗教や政治の団体から勧誘を受けることがあるが、それがその人のその後の人生を決めてしまうこともあるし、極端な場合、それがその後の家族形成や自身の子どもにも影響を及ぼす。山上容疑者の場合、自身の自殺未遂事件があっても母親は韓国での修行のため帰国しなかったという。

政治関係も同様だ。高校時代、仲の良かった2人が大学入学とともに別々の政治集団とかかわりをもった。少しすると2人の間では口論が絶えなくなっていた。憲法では信条や信教の自由は保障されている。しかしそれが他者の信条・信教の自由を損なうものであれば、人権問題が芽生えてくるといえるだろう。